XVIII

繪空ごと

文學が文學でなくなる時

集英社

吉田健一著作集 第十八巻
繪空ごと　文學が文學でなくなる時
昭和五十五年二月十日　第一刷印刷
昭和五十五年三月四日　第一刷發行
著者＝吉田健一
發行者＝堀内末男
發行所＝株式會社集英社
東京都千代田區一ツ橋二丁目五番地一〇號
電話＝東京（二三〇）六三六一〈文藝出版部〉
東京（二三八）二七八一〈販賣部〉
整版所＝株式會社中臺整版
印刷所＝大文堂印刷株式會社
製本所＝株式會社石橋製本工場
© 1980 Nobuko Yoshida, Printed in Japan
0395-171018-3041　落丁本・乱丁本はおとりかえします

吉田健一著作集　第十八巻　目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

繪空ごと　五
文學が文學でなくなる時　一九三
解題　四〇五

繪空ごと

Ecrasez l'infâme.—Voltaire.

1

この頃の東京は東京でないと言つてしまへば簡單である。併しそれで東京に住んでゐるものはどうすればいいのか。尤もその場合も色々と分けなければならないに違ひなくて、そこに住むものの多くが今日では自分がどこにゐようと全く無頓着な人種である時に東京がどんなであつても少しも構はない譯であるが、それが東京にとつて別に喜ぶべきことなのではない。どこの町でもそこが他所でも構はない人種といふのは有難くないものでさういふ人間の數が殖えるに從つて町が町らしくなくなる。これは全く妙なものである。又そんな風に町が町でないのがやり切れないものも別にゐて、そこが曾てはその町だつたことを知つてゐるものにとつてはなほ更である。それでどこでもそこの地着きのものがゐなければならないといふことになるのであるが、ここでもとの話に戻つて、それならば東京に長年住み馴れて今でも東京にゐるものはどうすればいいのか。

不思議なことに、例へば溜池の昔は電車の停留場があつた所が高速道路を被せられてどこなのか見當が付かなくなつてゐてもその上の高速道路を通つて澁谷邊から濱松町の方へ行く途中、自分が東京ではないどこか他所の町に來たとは思はない。そこから眺めれば普通は新たに出來た建物に隱されてゐる目印も見えるからといふこともあるかも知れないが、それならばそこからでは却つて見えない目

印もあつてそのやうなことよりも高速道路からの眺め全體が明かに東京の町といふもので他所と取り違へる餘地がないのである。これは戰後の東京の變り方を思へば怪んでいいことで道路の高さからすれば二十年前には郊外の綠が眼に映つた筈の所が今は建物に埋められてゐるのにやはり自分は東京にゐるのだといふ感じがする。或は別な例を取るならば、淺草は戰爭中に全燒してその後に何もかも建て直されたのであるから今の淺草の仲見世ならば仲見世を寫眞に取つて三十年前のと比べるならばその二つが同じ場所であると考へられる譯がなくても淺草に實際に行つて仲見世を歩けばそこは紛れもない淺草の仲見世である。

さうした事情の說明は拔きにして、それ故に今日の東京にも東京が殘り、それを據りどころに確かな生き方をしてゐる人間もゐる。落合勘八もその一人で、勘八は四谷に住んでゐた。この四谷もどこまでが燒けてどこが昔通りに殘つてゐるのか、その殘つてゐる所も大部分建て直された今日では見當も付かないが四谷三丁目と四丁目の間で電車通りから少し入つた横丁に昔のままの家が兩側に竝んでゐるのがあつて、その一軒を勘八は空襲で燒け出された直後に旨い具合に手に入れることが出來た。つまり、それから又燒け出されずにすんだといふことで、その後に何度か修繕はしても大體が初めにそこに來た時と少しも感じが違つてゐないのに就ては勘八はいつも昔の大工仕事がしつかりしたものだつたのに驚いてゐた。そこの小さな庭は戰爭中のことで原形を留めないまでに荒れ果ててゐて勘八は戰爭が終るまでそのままにはふつて置き、それから植木屋に來て貰つて家に釣り合ふやうなものに作り直した。

その爲に今はそこの前を通ると戰前から誰かが住んでゐて戰災も免れ、それからずつと手入れを怠

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

らないでゐる家と庭といふ風に見えた。尤もその横丁一帶の家がこれは勘八と違つて戰前からそこに住み着いてゐた人達の持ちものらしくて餘程古くなつて痛んでゐるのでなければ新築もせず、手入れも行き屆いてゐて、新築すれば先づもととさう違はないものが代りに建ち、その邊を歩いてゐると今は東京に珍しくなつた屋敷町といふものの氣分がしないでもなかつた。その屋敷町なるものの最も大きな特徴は凡てがひつそりしてゐて目立たないといふことで、この頃の屋敷といふのは金が掛つてゐることが何よりも目立つからさういふのが竝んでゐる所は屋敷町よりも新式の新築の展覽會に迷ひ込んだ感じがする。併しそれよりも勘八は自分の家を出たりそこに戻つて來たりすればその邊には人間が住んでゐるのが解ることに滿足した。これは季節毎に方々の庭の樣子が變ることでも明かで、自分が住んでゐる所に愛着があれば庭の植木にも念を入れることになる。

のみならず四谷の町竝が勘八の眼には昔からの四谷に映つた。これは四谷見附に赤坂離宮の方に向つての線があることから始り、新宿に行く電車通りが廣い割にその兩側に小さな店ばかり竝んでゐる具合もはつきりそこが四谷であるのを感じさせた。もともと勘八は四谷の住人ではなくてただ東京にゐて見馴れた四谷だつたのであるから昔の店がもとの場所に殘つてゐるかといふ風な細かいことは解らなかつたが、それよりもそこの通りを歩いてゐて向うに小さな果物屋があるとそれが如何にも四谷の電車通りの果物屋なのでその店が新築しただけで昔からそこにあつたといふ氣がした。その感じを强める爲よりも自分が或る所に住んでゐることを確認するのに幾つかの決めた店にいつも行くことが大切で、さうして決めた店と勘八ももう何十年かの付き合ひになつてゐた。本當は表通りを歩いてゐてどの店とも又そこの主人とも馴染みであるのが自分が故郷と呼べるものにゐることなのであるが、

それには四谷の通りが大き過ぎた。

さういふ店の一つに四谷見附から新宿の方に向つて最初の角を右に曲つた横丁に酒場があつた。そこは他にもその種類の店が澤山竝んでゐる所だつたが勘八はその酒場にしか行かなかつたからその名を擧げる必要もない。勘八がそこへ行き出したのは戰爭が終つて酒場などといふものが闇ででも又商賣を始めてからのことだつた。併し解せない感じになるのは戰爭になつて最後まで踏み止つた酒場や飲み屋が東京の所どころでまだ店を開けてゐた頃その酒場で何度か飲んだといふ記憶のやうなものがあることで、それに從へば店は同じでも場所は四谷でなくて新宿の盛り場だつた。勘八が四谷に移つてから最初にただ氣紛れにその店に入つて行つた時に一目でそこに前に確かに來たと思ひ、それからそれが新宿だつた筈であることが直ぐに頭に浮んで來てそこの所が怪しくなつた。併し入つて正面に酒場の止り木があつてその向うに店の主人らしいのが立つて働いてゐる具合も、止り木の上の日本間ならば鴨居に當る所に掛けた小面の能面が古いものなのではなくて酒場の埃で黑ずんでゐるのも見覺えがある氣がしてならなくて、それでももしその主人らしいのがそこの主人ならばこれは知らない人だつた。

向うもその店の給仕達も勘八を振りの客に扱つたのは代が換つたといふことで說明が付いたが二つの違つた場所に同じ一つの店があるのはやはり不可解で、これはそのまま謎になつて勘八の頭に殘り、それが一種の魅力になつて四谷で洋酒を飲む時にはそこと決めたからやがて勘八は主人とも給仕達とも馴染みになり、ただその店がどうして新宿から四谷までそつくりそのまま持つて來られたのかといふやうなことは幾ら醉つても聞けなかつた。その店の壁に止り木の上の能面と別に關係があるとも思

へない楕圓形の金額に入つた十九世紀風の鏡や明治初期の錦繪が掛つてゐるのも眺めてゐるうちに確かに前に見た覺えがある氣がして來て、ただその爲に勘八はその方に眼をやり、それは自分が同時に二つの場所に、或は過去と現在の兩方にゐる快感に似てゐた。そこで出す飲みものも惡くはなかつたが、これは酒場に置いてある程度のものならば今日では東京でも世界のその他どこでも先づ同じだと言へる。

前に見たことがあるのかどうか、そこの主人にも勘八は何か惹かれるものがあつた。初めからバーテンだつたのでも途中から例へば道樂が病み付きになつて本職のバーテンになつたのでもそのどつちでも可笑しくない年輪、或は風格がその日燒けした顏に現れてゐて、無駄口を利かなくて親切なのも餘計なことに頭を惱まさなくなつたのから生じるゆとりに取れた。それが店の流儀にもなつてゐるやうで給仕達にも及び、そこではただ飲んでゐればいい安心が勘八だけに止らないらしくてその店にはそこの定連があつた。勘八が早くからその一人だつたことは言ふまでもない。さういふ店の定連だつたから身元も何も知れてゐる一つの町內のもの同士がその溜り場に集るといふのとも違つて、その店に來る客を勘八は大概知つてゐて親しく口を利く間柄になつてゐながらその銘々がどういふ商賣のものかは勿論のこと名前さへも餘りはつきりしてゐないのが多かつた。その店のさういふ所も勘八の氣に入つてゐた。

この邊で勘八自身が何をしてゐたか書いて置いた方がいいかも知れない。勘八は何もしてゐなかつた。併しその半生を振り返つて見ると大抵のことはしたやうで、さうして何度も商賣を變へたのは失敗ばかりしてゐたからではなくてその逆だつた。その一番初めは友達に賴まれて捨て値で買つた土地

が法外に値上りしたのがきつかけで暫くやつてゐた不動産の賣買だつたが、これは當分使ひ切れさうもない財産が出來ると續けるのが意味がなくなつたので止めた。その次はやはり頼まれて一口乘つた私鐵會社の設立だつただらうか。これも當つて勘八はいい加減な時に役員を止めた。そんな風にやつて見ては止めたことの順序など覺えてゐられるものではなくて、それを思ひ出さうとするとただ切れぎれに頭に浮ぶものがあり、まだ昇降機といふものがない頃にビルの四階にある事務所まで階段を登つて行く所や、自分が乘つてゐる船が艀に引かれて神戸港を出て行くのや、ドイツの鐵工場で視察の一行から離れたのを見咎められてしどろもどろの返事をしてゐるのが僅かな間記憶に戻つて來るだけだつた。南太平洋で黑眞珠の養殖をしたこともあつてこれは外國の市場向けだつたから派手だつたが、その黑眞珠も笊に入れて持つて來られると何故そんなものが珍重されるのか解らなくなつた。又戰後は闇物資といふものがあり、それで今は又何もしてゐなかつた。

そんなことで世が渡れるものではないと思つたりするのも小說を讀み過ぎるからである。併し兎に角、四谷の酒場で飲んでゐる勘八は生活の手段を生活と取り違へて金が入つて來ることを生活の保障と考へる程の馬鹿、或は現代人ではなくてそこは確かに東京の、又東京といふやうな抽象的なことでは話にならないならば東京にある四谷の酒場だつた。或はその店が新宿にあつた氣がするのも新宿で行つてゐた店とそこに共通の性格の中でも著しいのが一軒の店である感じが克明である點にあるからではないかとも思ひ返された。昔はそれが當り前なことで今はそれを探さなければならないのはただそれだけのことで、もし自分が立つてゐる地面が水に浸されて來たならばどこかまだ水の上に出てゐる所を見付けて廻らなければならず、それがなくて水が增す一方ならば何れは溺れ死にするのだらう

が、まだ死ぬ時が來てゐなければ水の方でそのうちに引き始める。

或る冬の日の午後、晝寢から覺めて天氣がいいのでその店まで歩いて行つて煙草を吸つてゐると又一人客が入つて來て勘八がゐる卓子の前で立ち止り、

「元さんの晝廊が店開きするんださうです、」と言つた。

それで少くともその元さんといふのは一種の晝商、或は晝商の仕事もする人間だつたことが解る。その店開きのことを言つたのも勘八がその酒場で仲よくなつた人間の一人で何か會社をやつてゐるらしいことを人と話してゐる時の樣子などで勘八も知つてゐた。併し親しくなつたのはさういふことと關係がなくてその小峰さんといふのがただそこで飲んでゐてもそれがその小峰さんといふ人間の世界の一部での出來事でその世界がどういふものなのか見當も付かないままに確かにどこかに、或はそこに小峰さんの世界がある感じがすることが勘八には魅力があつた。それならば寄つ掛つて來られる心配がないのも氣持がよかつたが、この小峰さんを前に置いてまだ自分が知らない景色がもう少しで眺められるのではないかといふ思ひをすることが勘八に自分もさうした一つの世界に住んでゐるのではないかといふことに氣付かせた。さうなると人間といふのが懷しいものに感じられる。

その日も元さんの晝廊のことは一應それだけで打ち切りになつて二人はまだ電氣が付かなくて外からの日差しが床の一部に及んでゐる中で飲み始めた。それはウイスキーで、いつまで飲んでゐても別にどうといふことがないのがその日の午後に似てゐた。小峰さんも何を言つても變な風に取られるのを氣にしないでゐられる程度には勘八と親しくなつてゐて、

「日本でもの凄く上等なウイスキーつていふのを飲んでも大して旨くないのは妙ですね、」と感想を

述べた。
「さう、それだからこの位ので丁度いいんでせう。その本場から遠過ぎるんでせう。尤もその本場と言つても、――」
「さう、ウイスキーと同じ色をした水が流れてゐる川に小さな石の橋が掛つてゐて、橋を渡つた先の飲み屋の前を汚れた毛の羊の群が通つてゐる。その飲み屋に入れば小さなウイスキーの樽が幾つも逆さに止り木の向うの壁に取り付けてあるといふ所ですか。」
「その通りですよ。よく本場つていふことを聞かされるけれど、それがどんな本場なのか、外國ならばどこでも本場なんですかね。それぢやここはどこなんだ。」
「併し外國にゐてここのことを思ひ出すこともあるんだからここも四谷の本場なんでせう。かういふ小さな店が澤山竝んでゐる横丁が昔から四谷にあつた。」
勘八はそれを聞いて自分が確かにそこにゐるのを感じた。さうするとその延長で東京の町が擴つて行つて、
「元さんの畫廊を覗いて見ませうか。さうしないと義理が悪いでせう、」と言つた。
「今直ぐでなくてもいいでせう。どうせお祝ひの會か何かがあつて、それが早く終る譯がない。」
夕方になつてそこを出ると二人は元さんの畫廊がある銀座に行く車を電車通りで拾つた。四谷見附に立てばそこが四谷であるのにそこから赤坂の方に降りて行く赤坂と四谷の境目に當る濠端がどことも付かない全く荒涼たる感じがするのは妙である。これはお濠や昔の宮家の庭木が見馴れたもの、或は兎に角前からあつたものであるのに對して高速道路や新たに出來たホテルその他がまだそれ程眺め

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com